

島根の枯山水の庭いろいろ

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

平成25年度から3カ年、石見地方の庭園を視察した。石見地方の庭はそれまでに見た出雲地方の比較的定型化したものと異なり、様々な形式のものがあったが、特に印象に残ったのは、「石の庭」であった。平成26年度に見た重森三例玲作の村上氏庭園、小河氏庭園、平成27年度に見た大麻山神社庭園や江津の小川氏庭園、どの庭も非公開であったり、大きく紹介されていなかったりと一般的にはあまり知られていないものの、それぞれの庭の「石」には特徴があり、見る者の目を引くものであった。また益田市の医光寺、万福寺等画聖雪舟作とされる庭もその石組が高く評価されている。この中でも小河氏庭園や大麻山神社庭園は「枯山水」と呼ばれる水を使わない様式の庭園であるが、それぞれ趣を異にした庭であった。また、過去に訪れた出雲地方の「出雲流の庭」も基本的には「枯山水」であるが、ひとくくりにはできそうにない。

「庭石」は「水」、「庭木」、「景物」（灯ろう、手水鉢等）とともに日本庭園を構成する4大要素のひとつとされるが、この「庭石」と「敷き砂」を活かした作庭様式が「枯山水」である。県内にもいくつかの枯山水様式の庭が存在しており、これらについて注目した。

2. 枯山水の歴史と形式

日本庭園は大きく池泉庭園と枯山水に分類される。枯山水は一般的には水のない庭と解されている。日本の庭は四方を海に囲まれている関係上、海の景を再現することに力を入れられていたことから、池を作り、島を浮かべることが基本とされてきた。しかし立地的に水を引き入れることが難しい場合、水を象徴的に表すことが求められた。古くは平安時代に発生し、本格的には室町時代に確立されたとされている。平安時代以降、建物の前庭は儀式に利用できるよう砂が敷かれた広場であり、その背後に池泉を中心とした庭がつくられていたが、室町以降はその広場で儀式が行われなくなったため、庭として観賞に利用される空間となった。



竜安寺石庭（京都市）



大仙院庭園（京都市）

室町時代の最も代表的な枯山水の庭は京都の竜安寺である。方丈の前庭を長方形に土塀で囲い、白砂の広場に石を配したものである。これに対して水墨山水画の影響を受けたのが大仙院庭園であり、枯れ滝や蓬莱山を表現した立体的な枯山水庭園とされる。これ以降の枯山水庭園はこの二つの様式を手本にしたと言われている。

江戸時代以降の枯山水庭園は、正方形や長方形の地割りにとらわれず、自然風の敷地の地割りのものが増えてきた反面、自然の風景を具象的に表現する傾向があり、当初の抽象性、象徴性が弱まってきたとされる。また明治以降もこのような傾向は続き、各地の実業家の敷地や別邸などにつくられた大規模な庭園や庶民の庭に至るまで、池泉を備えた庭が大半を占めてきた。昭和になり一般庶民も庭を設けるようになるとともに、敷地や経済的な制約により枯山水が見直されるようになってきたと言われる。

※枯山水の年表（流れ）

時 代	枯山水の状況	代表的な庭
平安時代～ 鎌倉時代	日本初の庭園書「作庭記」に「枯山水」という言葉。 庭園の一部の野筋や山畔に設けられた自然写実的な様式	毛越寺庭園（岩手） 西芳寺庭園（京都）
室町時代	京都の禅宗寺院の庭を中心に発達をとげる。平面構成の庭が多く、象徴的な様式。山水画の影響も受ける。	竜安寺庭園（京都） 大仙院庭園（京都）
江戸時代	自由な地割りによる自然的景観を導入。枯れ池が確立。 象徴性から具象性の表現へ移行。築山、枯滝、枯流等。	南禅寺方丈（京都） 楽々園庭園（滋賀）
明治～大正	実業家による大規模な池泉庭園。自然主義的の台頭により 枯山水が激減。武学流庭園。出雲流庭園。	麟祥院庭園（京都） 鳴海氏庭園（青森）
昭和	一般大衆に小庭園が浸透。古庭園、枯山水への回顧。 新たな庭園デザインの動き（重森三玲等）	東福寺方丈（京都） 小河氏庭園（島根）

枯山水の庭には下表のようにいくつかの形式があるとされる。

分 類	特 徴	事 例
平庭式枯山水	ほとんど平らな敷地に造られたもの。	龍安寺方丈南庭（京都市）、円通寺庭園（京都市）等
準平庭式枯山水	枯山水平庭式の一部に低い築山などが付属する様式	金地院庭園（京都）、大徳寺本坊方丈庭（京都市）等
枯池式枯山水	水を用いなくて枯池を造ったもの （写実的な池泉式と象徴式あり）	徳島城表御殿庭園（徳島市） 退蔵院方丈西庭（京都市）等
枯流れ式枯山水	水の流れを白砂や小石敷きによって象徴した枯流れを主体とする	大仙院書院庭園（京都） 南宗寺庭園（堺）等
築山式枯山水	築山に傾斜地を生かして枯滝石組や枯流れを造ったもの	天龍寺（京都市）、 西芳寺（京都市）等

3. 島根にある枯山水とその特徴

島根県にはどのくらいの枯山水庭園があるのでしょうか。本分科会の宇野氏の平成25年度レポートの「島根の庭園リスト」をもとにその他の書籍資料も加味して、県内の庭園を分類してみる。

	安来、奥出雲、雲南等	松江、玉湯宍道、八束	出雲、斐川大社、平田	大田、温泉津	江津、浜田、益田、津和野	島根県内
枯山水庭園	5	6	20		7	38
池泉庭園	8	10	5	3	12	38
複合型の庭	3	2	1			6
路地(茶庭)	2	3	1			6
不明			1	2		3
計	18	21	28	5	19	91

県内の主要な庭91庭のうち、枯山水の庭は38庭と約4割を占めている。地域的に見れば、出雲、平田、斐川地域が極端に多いが、これらのほとんど(16箇所)が出雲流庭園である。過去のレポートでも紹介したように、出雲流の庭の特徴は、定型の敷地に敷き砂と飛び石を主体とした枯山水の平庭であり、松平不昧公の影響で茶道の要素を持ち合わせていることである。このように県内の枯山水庭園は、特に出雲地方では出雲流の庭に代表される。

それではこの他にはどのようなタイプの枯山水が見られるのでしょうか。前述の枯山水の形式に基づき、年代別に分類してみた。

分類	庭数	江戸以前	江戸時代	明治~大正	昭和
平庭式枯山水	16		<u>勝部氏</u> 、 <u>一畑薬師本坊</u> 、 <u>康國寺</u> 、 <u>本石橋家</u> 、 <u>石橋酒造</u> 、 <u>秦氏</u> 、 <u>願楽寺</u> (出雲)、 <u>椿氏</u>	<u>原鹿豪農屋敷</u> 、 <u>財間氏</u>	<u>絲原諒氏</u> 、 <u>島根県庁</u> 、 <u>蓬萊吉日庵</u> 、 <u>皆美館</u> 、 <u>秋上氏</u> 、 <u>小河氏</u>
準平庭式枯山水	9		<u>鱒淵寺是心院</u> 、 <u>鱒淵寺旧浄観院</u> 、 <u>木佐本陣記念館</u> 、 <u>布野氏</u> 、 <u>山本氏</u>		<u>築地松民家A,B,C</u> 、 <u>雪舟の郷記念館</u> (八景園)
枯池式枯山水	3		<u>雲樹寺</u>		<u>さぎの湯荘</u> 、 <u>松江歴史館</u>
枯流れ式枯山水	3		<u>本高見家</u> (平庭式の要素)	<u>広江氏</u> 、 <u>出雲文化伝承館</u> (平庭式の要素)	
築山式枯山水	3	<u>乗光寺</u> (平安末?)	<u>大麻山神社</u>		<u>安楽寺</u>
不明	4	<u>大日堂</u> 、 <u>手銭記念館</u> 、 <u>阿弥陀寺</u> 、 <u>明光寺</u>			

※下線は出雲流庭園とされるもの、網掛けは寺院等の庭園

全体的には平庭式と準平庭式が 25 庭と 6 割以上を占め、枯れ池式、枯流れ式、築山式といった様式は合わせて 9 庭で、県内では少数派といえる。

平庭式を見ると、16 庭の内 11 庭が出雲流庭園といわれる様式の庭で、島根県を代表する枯山水の庭とあってよいだろう。枯流れ式の内、本高見家、出雲文化伝承館についても、平庭式の中に枯流れがあるものであり、主役は平庭の枯山水部である。その他、島根県庁の庭、小河氏庭園等昭和以降に重森三玲、完途らによって作庭された新しいデザインの庭が含まれる。また出雲市の願楽寺の庭は、寺院の庭特有の枯山水で、円通寺、聚光院等の要素が見られるとされる数少ない庭のひとつである。現在はやや荒れた風情であるが、刈り込等の樹木により隠れている石組の見せ方によっては県内でも貴重な寺院の平庭式枯れ山水として光が当たるかもしれない。



小河氏庭園（益田市）



出雲文化伝承館庭園（出雲市）

枯山水式の庭は、瞑想や座禅の場にふさわしい造景として、室町時代の禅宗寺院を中心に発達を遂げたが、当時は京都のみでつくられ、地方にまでは波及しなかったといわれている。県内の禅宗寺院（臨済宗、曹洞宗、黄檗宗）の庭は 11 あり、枯山水式 4 に対して池泉式 7 となる。また枯山水の寺院庭園 13 庭のうち禅宗の庭は 4 庭であり、枯山水＝禅宗の庭として島根に伝搬してきたというわけではなさそうである。

準平庭式の庭についても出雲流の庭が過半を占めている。この中に含まれる簸川平野の築地松民家の庭は、比較的小さな面積の庭に奥行き感を出すために庭の背後に築山をついたものである。鱈淵寺の 2 庭は、山畔を活用した築山式に近い形態で、江戸時代中期以降の寺院の書院前の庭として典型的なものとされ、県内では比較的珍しい様式の庭であるが、すでに建物はなくなり、庭は荒廃してわずかに石組を残すに至っているのは残念である。



築地松民家の庭（斐川）



鱈淵寺是心院庭園跡（平田）

枯池式と枯流れ式は区分が難しい部分もあるが、出雲流庭園の場合は、手前の敷き砂と飛び石の空間が主役となり、枯れ池や流れはその背景として見せているように思われる。一方、雲樹寺は枯れ池を主役として背景のサツキの刈り込みの山畔を見せる庭であり、さぎの湯荘は敷き砂そのものを流れとして表現している庭である。

築山式枯山水庭園は、県内の主要な庭では3庭しか確認できておらず、貴重なタイプのものといえる。歴史的には室町以前の枯山水が確立される前と江戸期中期以降の寺院に見られる様式とされる。県内の3庭も作庭時期が大きく異なっている。最も作庭時期が古いのが乗光寺（東出雲）である。平安末期に富田城を築いた平是清が作庭したといわれており、これが事実ならば県内でも最も古い庭となる。平安期から鎌倉初期までの山畔や野筋を活用して石を組んでいく枯山水の方式である。大麻山神社（浜田市）の作庭は江戸初期といわれている。室町以降の正方形や長方形の平地をベースとした庭から、この時代になって出現した自然の敷地を活用し自由にレイアウトする様式の枯山水のひとつとして紹介されている。自然の山畔を利用して近辺から採取した巨石による力強い石組は、庭園書等でも高い評価を得ている。安楽寺（浜田市）は昭和56年にできた新しい庭園である。日本庭園研究家の第一人者ともいえる森蘊（もり・おさむ）作庭とのこと。裏手の山の斜面を利用して形成され、その中央に石のみで形作られた枯滝が庭全体を貫いている。森氏は枯流れ式枯山水でも有名な南宗寺の修復にも参加しており、桃山時代特有の枯滝、枯流れの要素を入れたものかもしれない。これもまた貴重な庭といえそうである。



大麻山神社庭園（浜田市）



乗光寺（東出雲）

以上のように、県内の枯山水庭園は平庭式、準平庭式が主流で、それらの多くが出雲流庭園に属するものである。また、数は少ないものの平安期から江戸期までの様式を持つ、枯池式や築山式の貴重な庭も見られる。

また、枯山水庭園は室町時代の竜安寺庭園や大仙院庭園のような象徴性の高い様式と、江戸期以降の築山や枯れ池等を設けて自然を表現した具象性の高い庭があるとされる。一般的には平庭式や準平庭式は象徴性が高く、枯池式、枯流れ式、築山式がより具象的で象徴性が低いとされている。象徴性の高い庭の代表は小河庭園であろう。

「永遠のモダン」と表される重森三玲の独特の抽象デザインの庭である。それでは同じ平庭の代表格である出雲流庭園はどうであろう。出雲流庭園の大きな特徴は敷き砂に置かれた飛び石の造形美といわれる。三玲の庭ほどの象徴性は高くないように見え

るが、それは敷き砂空間の背景に樹木のスクリーンがあったり、手前に茶道の要素の灯ろうやつくばいがあったりするからであろう。やはり全国各地にある自然を縮小したような具象性の高い庭園と比べると出雲流庭園の創造性、独創性の高さを改めて感じてしまう。

＜出雲流庭園の敷き砂と飛石による造形＞



原鹿豪農屋敷庭園（斐川）



本高見家庭園（斐川）

6. おわりに 枯山水庭園のこれから

今年の11月に出雲市の鱒淵寺境内が文化財審議会の答申により、平成28年には正式に国の史跡に指定されることとなった。鱒淵寺境内には少なくとも4つの庭があったとされ、その内の2庭は前述の枯山水庭園である。昨年の紅葉の時期の訪れた際、美しい紅葉の中に廃墟と化した是心院の庭に残された石組を確認することができた。史跡指定にともない今後調査、復元等が行われることになるのであろうが、昭和50年の小口氏、戸田氏による調査でも是心院の石組や築山の形態は確認されており、復元も容易なのではないか。樹木は変わるが、石は変わらない。築山の下草を取り除き、敷き砂を行うだけでも十分に観賞に堪える枯山水になると思われる。加えて旧浄観院、旧等樹寺の復元と本坊庭園の一般公開を行うことにより、紅葉時期以外の鱒淵寺の新たな魅力づくりになるものと思われる。

その他にも、文化庁で「近代の庭園・公園に関する調査研究報告書（平成24年）」において、名勝、登録記念物に加えて、保護措置を検討すべき庭園として、県内でも皆美館庭園、島根県庁庭園、ホテル宍道湖庭園、出雲市立図書館庭園、小河家庭園、等の枯山水庭園を掲載している。また報告書では、島根県の枯山水庭園の代表格でもある出雲流庭園についても、「津軽、出雲等の特定の地域に集中して分布し、独特の意匠、構造を示す庭園群については、芸術上、学術上の価値を有するものを群として保護していく視点が重要である。」としている。

このように枯山水の庭をとっても、県内には全国に誇れる貴重な庭が多く残っている。定番の足立美術館や由志園だけではなく、庭の宝庫といっても良いと思われる。観光立県として、これらの庭を文化性の高い地域資源として光を当て、保護、活用を図って行くことが必要であると、特に廃れていく庭などに会うと改めて感じてしまう。

＜参考文献＞ 「枯山水」（2008）：重森三玲